

目次

はじめに	
2013年度ESD-J事業報告 概観	2
ESD-J 2013年度の成果ダイジェスト	4
数字で見る2013年度のESD-J	5
2014年ESD世界会議および2015年以降の推進体制づくりに向けた準備および提言活動事業	6
オールジャパンによるESD世界会議の推進と ポストESDの10年に向けた全国センターの提案	7
2014年のESD世界会議をオールジャパンで迎える準備	8
2015年以降のESD推進体制の検討と提案	10
地域におけるESD推進とコーディネーターの社会化推進事業	12
コーディネーター育成の基本ツールのとりまとめ	13
ESDコーディネーター育成の事業化	14
全国ミーティングの開催	16
学校と地域が連携したESD推進の仕組みづくり事業	18
学校と地域が連携したESD推進の拡大に向けて	19
国際ネットワーク推進事業	20
アジアのNGOによるESDネットワーク形成元年	21
震災復興とESDをつなぐ事業	22
震災復興とESDをつなぐ	23
普及啓発、情報収集・提供およびインフラ構築事業	24
2014年以降に向けた情報の発信	25
地域発ESD ESD-J地域担当理事レポート	26
ESD-J 2013年度活動履歴	28
団体正会員・賛助会員・特別賛助会員・連携交流団体名簿	30
役員および実施体制	31
2013年度決算見込	32

※ 表記簡略化のため、文中の敬称は略させていただきます。

2013 年度 ESD-J 事業報告 概観



ESD-J 代表理事 重 政子

2013 年度は、ESD の 10 年総括会合を来年に控え、ユネスコや日本政府においてもようやく具体的な準備が始まり、広報活動などにもわかに活発化してまいりました。そして、これまで様々な立場で推進してきた ESD の活動現場のグッドプラクティスや課題を集約し、ポスト 2014 に向けた評価や提言をまとめるための取組みが様々な主体によって動きはじめました。

ESD-J にとりまして第 4 期（2012-2014）の中間年であった 2013 年度は、

1. 2014 年 ESD 世界会議および 2015 年以降の推進体制づくりに向けた準備および提言活動
2. 地域における ESD 推進とコーディネーターの社会化推進
3. 学校と地域が連携した ESD 推進の仕組みづくり
4. 国際ネットワーク推進
5. 震災復興と ESD をつなぐ
6. 普及啓発、情報収集・提供およびインフラ構築

の 6 本の柱を基に、オールジャパンの様々な立場の方たち（マルチステークホルダー）とともに、ポスト 2014 の ESD 推進の仕組みづくりに向けた事業展開がなされた、意義深い年度でありました。

ESD-J は、様々な教育的な活動を通して多様な立場の人びとと連携協力することでこそ ESD の価値が共有され効果は上がるとして、活動を続けてきました。2014 年の ESD 世界会議をオールジャパンで迎えるために、これまで ESD に取り組んできた多様な主体の発信の場づくりに向けた提言活動の一つとして、世界会議開催会場の地（岡山）で、ESD-J 全国ミーティングを開催。さらに、世界の祭典推進フォーラムとの共催で、ESD 地球市民会議を開催し、これらを通して、オールジャパンによる市民版 ESD 会議やサイドイベントの企画の必要性をアピールすることができました。

これまで、ESD 推進機関や行政機関、議連、産業界、関係者とともに、2015 年以降に残すべき ESD 推進の仕組みについて検討してきました。そうした中で、地域の ESD 推進の在り方や、全国レベルでの推進機能とその組織の在り方を集約した ESD 全国センター構想（仮）を図示化して公開し、会員内外から意見聴取のきっかけをつくることができました。全国センターの設立は、持続可能な地域づくりをベースに、ローカルとグローバルを統合させたグローバルな視点に立った ESD を推進していくことを意図しています。地域の ESD を支援するハブ機能をもったセンター、世界・国としての課題解決を提案できる組織横断型のセンターとしての提案です。ESD-J の内外を問わず、政府関係者や企業関係者からも支持が表明され、必要性を理解する人たちの数が増えてきています。全国センター設立を望む期待の高さがうかがえ、実現の可能性は高いと見ることができますが、縦割り意識や資金問題など、課題はまだまだあると言えます。そのためにも、グローバルな視点で、SDGs^{*1}、ポスト MDGs^{*2} などの枠組みに、ESD を明確に位置づける提案を発信していくことが大事とされます。



コーディネータープロジェクトでは、地域の現場で多様な分野のコーディネーターがESDの視点やコーディネーションスキルを身につけるためのESDコーディネーター研修をモデル実施し、総合的なカリキュラム案を作成するとともに、その研修ツールとしての視聴覚教材を作成しました。これらを通してESDコーディネーター育成の事業化の基礎ができ、多様な分野のコーディネーターの学びあいの場、ESDコーディネーターのネットワークが広がりはじめたことは評価に値します。

また、学校と地域が連携したESD推進の仕組みづくりでは、環境省の事業として、学校教育のなかで実施可能な20件のモデルプログラムを完成。これを全国に提示できたことは、今後のESDコーディネーターの活躍の場としても大いなる展望が持てます。

NGOによる国際ネットワーク推進では、これまでの国際的な情報収集・情報提供の蓄積を基に、アジアのESDネットワーク（ANNE）設立の具体的な準備が始まりました。その一環として、来期早々にインドへの調査派遣の準備も整っています。

震災復興とESDをつなぐための活動では、全国ミーティングにおいて、東北で震災復興に奔走してきたキーパーソンを迎え、その問題意識とESDの目指す方向の接点を共有することができました。また、地球市民会議では防災・気候変動教育とESDのつながりを議論、今後地域市民社会からのESD提言につながっていくと考えられます。

普及啓発、情報収集・提供およびインフラ構築の具体的な活動としては、『ESDレポート』、『未来へつなく』の発行、ウェブサイトの更新等、タイムリーに発信することができました。

ESDの10年総括会合の前年にあたり、ようやく、あらゆる分野でESDが共有する教育の再方向づけの重要性が改めて見直されています。ESD-Jとして、ポスト2014に向けて提案した“ESD全国センター構想（仮）”は、官民のあらゆるステークホルダーの皆様とともにさらに検討を重ね、より具体的な提案として、2014年に続く未来へつないでいきたいと願っています。

本事業に携わってご尽力くださった皆様に心からの御礼と感謝を申し上げます。

- ※1 SDGs : Sustainable Development Goals = 持続可能な開発目標
- ※2 MDGs : Millennium Development Goals = ミレニアム開発目標

2014年世界会議と2015年以降のESDに向けて

2014年のESD世界会議を オールジャパンで迎える準備

☞ p8

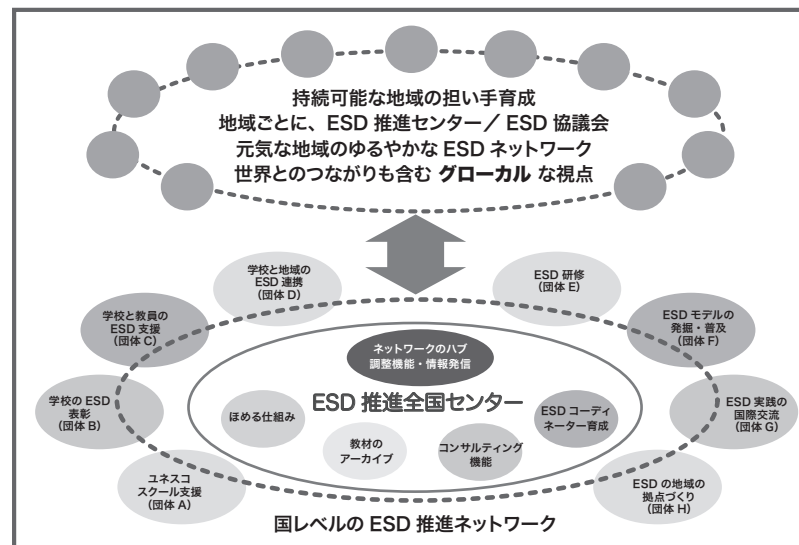
- 成果1** 「世界の祭典」推進フォーラムとの連携によって、「ESD 地球市民会議」および「ESD テーマ会議」を開催。2014年に向けた機運の盛り上げ、多様な主体の参加による「ESDを推進するために必要な機能」の議論を展開
- 成果2** 文部科学省、地球環境基金などとの調整が進み、「地球市民村事業」を国連大学の協力も得て2014年8月に開催することが確定

2015年以降の ESD推進体制について

☞ p10

- 成果1** 環境省が2015年以降のESD推進策を検討する懇談会を立ち上げ、検討をスタート。ESD-J理事から2名、会員から2名が参画
- 成果2** 2015年以降のESD推進のための機能と仕組みに関するイメージ図を作成、公表
- 成果3** 2015年以降のESD推進の枠組みとなるグローバル・アクション・プログラムへの提言作成とインプット

ESDを強かに推進していくために望ましい仕組み



(ESD-J作成図に阿部が加筆)

ESD-Jの2013年度は、2014年に開催されるESD世界会議をオールジャパンで迎える準備と、2015年以降のESD推進体制の検討と提案、この二つに向けて力を注いだ年になりました。その中で、2015年以降もESDを展開していく上でキーとなるESDコーディネーター育成の事業化に取り組み、また日本の各地でも、2015年以降を見据えた様々なESD活動が、地域と連携しながら進められていきました。

ESDコーディネーター育成の事業化

☞ p14

- 成果1** ESDコーディネーター育成のためのカリキュラム全体像(案)と、地域のコーディネーターや実践者などの対象別研修パターンを作成
- 成果2** ESDコーディネーター研修に活用したり自主学习にも使える映像教材を作成
- 成果3** コーディネーター育成の取組みを紹介するニュースレター『未来へつなく』を発行
- 成果4** プロジェクトの進捗や成果を公表するウェブサイトの内容を充実

全国ミーティングの開催

☞ p16

- 成果1** 岡山市との共催で、市内の公民館の取組みをベースとした実質的な学びの場を創出、のべ250名が参加
- 成果2** 2014年に向けた情報共有を行い、ラストスパートへの盛り上げを醸成

各地域のESD

☞ p26

- 成果1** 協働によるESDを生み出す基盤づくりに取り組む地域が増加

数字で見る2013年度のESD-J ()内は2012年度の数字

●ネットワーク 2014年3月末

団体会員：**116団体**(125団体)

正会員81(89)、準会員19(22)

賛助会員10(8)、特別賛助会員 1(1)

連携交流団体5(5)

個人会員：**259名**(306名)

正会員102(125)、準会員157(181)

メルマガ登録者：**2,271名**(2,219名)

●事業

実施事業数：**11事業**(12事業)

共催・後援・協力事業数：**13事業**(17事業)

●情報発信

ウェブサイト記事発行数：**128記事**(104記事)

メルマガ：**10本**(8本)

会員メーリングリストの投稿数：**360本**(492本)

2014年ESD世界会議および 2015年以降の推進体制づくりに向けた 準備および提言活動事業

2013年度成果報告

2014年に向けた目標

- 2014年の世界会議およびその関連イベントにおいて、これまでESDに取り組んできた多様な主体の活動と、2015年以降のESD推進の仕組みについて、オールジャパンで発信できる場がつけられている。
2015年以降のESD推進の仕組みのイメージが関係者に共有されており、そのハブとなる「ESD全国センター」実現に向けた準備が始まっている。

2013年度の主な事業

1) 2014年のESD世界会議をオールジャパンで迎える準備 (p8)

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムとの連携により、「地球市民会議」および「ESDテーマ会議」を共催すること等を通して、これまでESDに取り組んできた多様な主体の発信力の強化支援に取り組むとともに、オールジャパンでの発信の場づくりに向けた提言活動を展開した。

2) 2015年以降のESD推進体制の検討と提案 (p10)

ESD推進機関や行政機関、議連、産業界、関係者とともに2015年以降に残すべきESD推進の仕組みとして、地域のESD推進の在り方やESD全国センター（仮称）の在り方（機能や組織）を検討し、その実現に向け関係主体に働きかけた。

オールジャパンによるESD世界会議の推進と ポストESDの10年に向けた全国センターの提案

代表理事／2014年ESD世界会議および2015年以降の推進体制づくりに向けた
準備および提言活動事業担当：阿部 治



今期の活動も多岐にわたっていましたが、大きくは、ESD-J設立の主要目的であった、以下の二つに大別できるかと思えます。

- ① オールジャパンの参加によるESDユネスコ世界会議開催に向けての動き
- ② ポストESDの10年のESD推進の仕組みづくり

①の“オールジャパンの参加によるESDユネスコ世界会議開催に向けて”は、ESD-Jの姉妹組織に当たる世界の祭典推進フォーラムを通じて（代表や理事などがESD-Jと重複）、6年前からESD地球市民会議を開催し、準備に取り組んできました。2013年度はESD-Jと推進フォーラムとの共同歩調をより強固にして一体的な活動を推進。最終年である2014年のESDユネスコ世界会議に向けた、オールジャパンによる市民版ESD会議やサイドイベントの計画を練ってきました。ユネスコ本部によるプランの遅れや情報開示の遅れ、関係者間の意識の共有を図るESD円卓会議の未開催など様々な事情もあり、2014年11月に名古屋で開催予定だった市民版ESD会議を8月に国連大学で行うことに変更。こうした動きの中でESD-Jは、初心に帰り、多様なステークホルダーや個人のハブとしての設立初期の役割を再確認し、中心となって準備活動を進めています。2013年度の成果は、2014年8月の市民版ESD会議、11月のESDユネスコ世界会議の正式サイドイベントやフォローアップ会合など、ESD-Jのミッションと不可分な事業の取組みへとつながっていきます。

②の“ポストESDの10年のESD推進の仕組みづくり”については、関係するステークホルダー間での検討を行いながら、岡山での全国ミーティングで初めて一般向けに公開し、その中身の検討を地球市民会議2013で行いました。持続可能な地域づくりをベースに、ローカルとグローバルを統合させ、グローバルな視点に立ったESDを推進していく全国センターの設立を意図しており、ハードよりはソフトを中心にしたハブ機能を有する組織ですが、あくまでも地域のESDを支援し、世界との窓口となる課題・組織横断型のセンターになります。提案以来、ESD-Jの内外を問わず、必要性を理解する人びとの数が増えていることから、ESD全国センターへのニーズが確実にあると思われます。政府関係者や企業関係者からも支持が表明される一方で、縦割り意識や資金問題など、実現に向けた課題も少なくありません。2014年度は、SDGs（持続可能な開発目標）など大きな枠組みを踏まえ、ポストESDの10年に向けたESD推進組織について、グローバルな議論を基に実行可能性の高い提案にすべきであると考えています。

2014年のESD世界会議をオールジャパンで迎える準備

2014年のESD世界会議をオールジャパンで迎える機運を盛り上げるべく、「地球市民会議」および「ESDテーマ会議」の準備を「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムと連携しながら進める中で、ESDに取り組む多様な主体とともに今後のESD推進の仕組みについて議論を進めた。

この事業でめざしたこと

2014年の世界会議およびその関連イベントにおいて、これまでESDに取り組んできた多様な主体の活動と、2015年以降のESD推進の仕組みについて、オールジャパンで発信できる場を実現する。

2014年の世界会議関連イベントへの布石として、「地球市民会議」や「ラーニング・プログラム」を成功させる。

成果

- 1 「世界の祭典」推進フォーラムとの連携によって、2014年に向けた機運の盛り上げ、多様な主体の参加による「ESDを推進する仕組み」の議論を行うことができた。
- 2 文部科学省、地球環境基金などとの調整が進み、「地球市民村事業」を国連大学の協力も得て2014年8月に開催することが確定した。

プロジェクトの体制

リーダー： 阿部 治、重 政子

事務局： 村上 千里

協力者： 名執 芳博、「ESDの10年世界の祭典」推進フォーラム、鈴木 克徳、池田 満之、三隅 佳子

事業の主なプロセス

■「ESD10年・地球市民会議2013」および「ESDテーマ会議」の共催

1) ESDの10年・地球市民会議2013

開催日 2013年10月18日(金) 会場 岡山コンベンションセンター (岡山市)

主催 文部科学省、日本ユネスコ国内委員会

共催 「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム、岡山市、ESD-J

日本と世界の最新動向を共有し、ESDをもっと広めるための課題について参加型の討議を行いながら、2014年のESDの10年最終年をオールジャパンで盛り上げるシンポジウムを開催。ESDを推進するための仕組みのキーワードとして、「地域のガバナンス」「教材のアーカイブス化」「ほめる仕組みづくり」を議論した。

2) ESDテーマ会議2013

開催日 2013年10月19日(土) 会場 岡山コンベンションセンター (岡山市)

主催 「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム

共催 岡山市、株式会社岡山コンベンションセンター、ESD-J

5つの重要テーマ「防災教育と気候変動教育」「生物多様性とESD」「持続可能な生産と消費」「歴史文化遺産と人材育成」「貧困撲滅と社会的公正のための教育」の事例から、それぞれの優れた実践を切り口に、ESDの効果・成果や課題を探った。

■「ESD地球市民村ラーニング・プログラム」の共催

開催日 2014年1月13日(月・祝)

会場 ウィンクあいち(愛知県産業労働センター)

主催 「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム

2014年1月に名古屋で行われた「ESDイヤー・キックオフイベント」の一環で、地球市民村「ラーニング・プログラム」を共催。子どもにも大人にもESDプログラムを体験してもらうことを目的に6団体がプログラムを実施した。

ESD-Jは環境省中部環境パートナーシップオフィス(EPO中部)と協働し、「未来をつくる授業」をタイトルにしたプログラムを実施。愛知県岡崎市立新香山中学校の教員が作成した授業案をもとに、模擬授業を行っていた。授業タイトルは、「サステナブルを探求しよう～あなたは、どのペットボトルを買いますか?」。約30名の参加者が、中学生になった気持ちで授業を体験し、疑問や気づきを話し合うことで、ESDが大切にしている概念や、手法を体感し、学び合うことができた。

■「地球市民村事業」開催の働きかけと発信

2014年ESDユネスコ世界会議と並行して、全国のESD関係者が集い、活動の成果を発表・交流する場として「地球市民村事業(地球市民会議とテーマ会議、ラーニング・プログラム)」を開催することを、「世界の祭典」推進フォーラムとともに日本政府および愛知県に対して提案。2014年8月に東京で開催することに方針変更。岡山および愛知での世界会議関連情報とともに、2014年のイベント情報としてウェブサイトで紹介した。



ESDの10年・地球市民会議2013

■ 文部科学省「ESDに関するユネスコ世界会議」ステークホルダーの主たる会合に関する運営協議会への参画

プロジェクトの自己評価

担当理事：重 政子

ESD世界会議を意識したESD-J全国ミーティングの開催、「ESD地球市民会議」および「ESDテーマ会議」の共催、「ESD地球市民村ラーニング・プログラム」への参画を通して、マルチステークホルダーによるESD活動の実態の情報交換とともに、さらに推進する仕組みについても知見が集まり意義深かった。開催地をはじめとする一般市民に対してもESD理解を広めるきっかけとなり、世界会議開催への意識高揚にもつながった。このオールジャパンでの取組みは、会員内外へ信頼と理解を広げている。

2015年以降のESD推進体制の検討と提案

ESD推進機関や行政機関、議連、産業界、関係者とともに議論を進め、2015年以降に残すべきESD推進の仕組みとして、地域のESD推進の在り方やESD全国センター(仮称)の在り方を検討し、その実現に向けて関係主体に働きかけた。

この事業でめざしたこと

2015年以降のESD推進の仕組みである「ESD全国センター」を実現する。

2015年以降のESD推進の在り方の議論を活性化し、多様な関係者が賛同できるような企画案を作成する。

成果

- 1 環境省が2015年以降のESD推進策を検討する懇談会を立ち上げた。ESD-J理事および会員からは4名が参画している。
- 2 2015年以降のESD推進のための機能と仕組みに関するイメージ図を作成した。(右ページの図)

プロジェクトの体制

リーダー： 阿部 治、重 政子
事務局： 村上 千里
協力者： 鈴木 克徳、名執 芳博

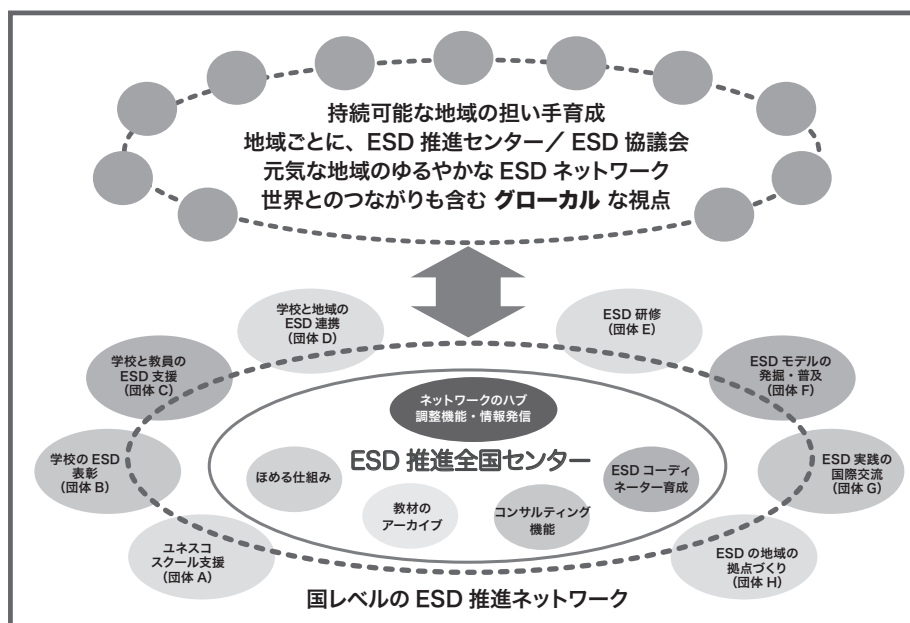
事業の主なプロセス

■ 2015年以降のESD推進の仕組みに関する提案作成

理事懇談会や組織運営理事会議等において、2015年以降のESD推進の仕組み案を作成、ESD-J全国ミーティング(6月)、地球市民会議(10月)、清里環境教育ミーティング(11月)、開発教育全国ネットワーク会議(3月)などで意見交換を行いながら修整を加えた。11月にはウェブサイト上でも公開し、広く意見を求めた。

- | | |
|-----------|------------------------------|
| 4月6日 | 組織運営理事会(ロードマップの作成) |
| 5月18日 | 理事懇談会(必要な機能について) |
| 6月15-16日 | 総会、全国ミーティング(意見交換) |
| 8月22日 | 理事懇談会(必要な機能と市民提案形成のプロセスについて) |
| 10月18-19日 | 地球市民会議(意見交換) |
| 10月中旬 | 全国EPO連絡会(意見交換) |
| 11月10日 | 理事懇談会(イメージ図と必要な機能について) |
| 12月21日 | 理事懇談会(必要な機能と市民提案形成のプロセスについて) |
| 2月28日 | 組織運営理事会議(市民提案形成のプロセスについて) |
| 3月23日 | 理事懇談会(市民提案形成のプロセスについて) |

ESDを強力に推進していくために望ましい仕組み



(ESD-J作成図に阿部が加筆)

■2015年以降のESD推進の仕組みづくりの動きかけ

秋以降、文部科学省国際統括官付および環境省環境教育推進室、国会議員等への働きかけを頻繁に行ってきた。環境省では1月より、ESDの10年後の環境省環境教育推進方策懇談会をスタート。ESD-Jからは阿部代表理事、関理事他、会員も含め4名が参画している。

■グローバル・アクション・プログラム(GAP)へのインプット

2015年以降のESD推進の枠組みとなるグローバル・アクション・プログラムのドラフトの暫定訳を公開し、会員から意見を募集。意見をとりまとめて提案書を作成し文部科学省へ提出した。提案は文部科学省経由でユネスコに届けられたが、修整されることなく確定した。

暫定訳および追加提案は、ESD-Jのウェブサイトで公開している。なお、追加提案は今後、GAPのロードマップ(解説文書)を作成するときに、参考にしていただくよう働きかけていく予定。

■2013年参議院選挙における公開質問状と回答の公表

7月21日に実施された参議院選挙にあたって、各政党の「ESD＝持続可能な社会に向けた担い手づくり」に関するビジョンと政策、2014年のESDユネスコ世界会議への取り組み姿勢、ESDの10年終了後のESD継続発展に向けた考えについて問う公開質問状を送付。7政党より回答をいただき、公開した。

プロジェクトの自己評価

担当理事：重 政子

環境省が2015年以降のESD推進策を検討する懇談会を立ち上げ、ESD-J提案も視野に入れた検討をスタートさせたことは評価できる。また、この10年の活動蓄積を基にした全国センター構想の提案等は、各省庁との連携がスムーズに動きはじめ、今後の活動に効果が期待できる。

地域におけるESD推進と コーディネーターの社会化推進事業

2013年度成果報告

2014年に向けた目標

- 多様な分野のコーディネーターがESDの視点やスキルを身につけるESDコーディネーター研修のカリキュラムを確立するとともに、テキストブックを発行する。また、多様な分野のコーディネーターが学びあう場、ESDコーディネーターのネットワークが広がっている。

2013年度の主な事業

1) ESDコーディネーター育成の事業化 (☞p14)

OJT型のコーディネーター育成研修開発およびモデル実施を行い、コーディネーター育成研修におけるカリキュラム案を作成した。また、ESDの理解の促進と、コーディネーションのスキルを磨くビデオ教材開発に取り組み、これらを通して、ESDコーディネーター育成の事業化の基礎をつくった。《地球環境基金助成、パナソニックNPOサポートファンド助成等》

2) 全国ミーティングの開催 (☞p16)

多様な主体の連携によるESDの実践地域・岡山市にて、2014年に向けた多様な主体の動きの「見える化」と、コーディネーションの在り方を学びあうことを目的とした全国ミーティングを開催した。《岡山市共催、地球環境基金助成》



全国ミーティングにて

コーディネーター育成の基本ツールのとりまとめ



理事／地域におけるESD推進とコーディネーターの社会化推進事業担当：壽賀 一仁

「ESDコーディネーターの研修カリキュラム確立とネットワーク形成」という2014年度達成目標に向けて、2013年度は多くの具体的成果物をつくり上げることができました。

6月に岡山市で開催された全国ミーティングでは、ネットワーク形成に向けた様々な分野のコーディネーターの交流とともに、ESDコーディネーターの在り方に関するオープンな議論が行われました。その結果、本事業のアウトプット（研修カリキュラムと研修ツール）について、たくさんの意見をいただくことができました。モデル事業を実施した4地域の関係者は、こうした意見も踏まえてアウトプットに対する共通理解をつくり、ESDコーディネーター育成のための基本カリキュラム案をまとめました。モデル事業の関係者同士が、地域ごとの文脈の違いは踏まえつつも、カリキュラムの汎用化に向けて踏み込んだ検討を行い、それぞれの研修のエッセンスを、共通の全体像と対象者別の実施パターンへと整理していったことは特筆に値します。

一方、テキストを使って集合研修を行うといった従来型の枠組を超えた、新たな研修形態にも役立つ実践的ツールとして映像教材が検討され、ESDコーディネーター育成に有用なコンテンツリストがつけられました。2013年度に完成した17本は、主にコーディネーターのスキルにかかわるものですが、実践者のインタビュー、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）、楽しいイラストの活用、等々、製作手法が多彩でとても興味深いものに仕上がっています。

以上の成果は、ニュースレター『未来へつなぐ』第4号・第5号で会員の皆さんにご報告しました。随時進捗状況をお知らせしてきたウェブサイト“未来へつなぐ”は、基本カリキュラム案、対象者別の実施パターン（プログラム事例集）、映像教材など、各種のアウトプットを見ていただける、いっそう充実したものになりました。さらに、映像教材に関しては、一般の方たちにも広く知っていただけるよう、インターネットのYoutubeに、チャンネル“未来へつなぐ～ESDコーディネータープロジェクト～”も開設されました。

ただ、映像教材の再生回数が見ると、残念ながらこれらのアウトプットが多くの人に知られ活用されるまでには、まだ至っていません。したがって2014年度の活動に対する一番の期待は、2013年度の成果物であるESDコーディネーター育成の基本ツールを精力的に広報していくことです。関心を持つ人の輪が広がれば、基本ツールを活用した多くの研修が全国各地それぞれの文脈のなかで行われるに違いありません。その結果、ESD次の10年に向けたコーディネーターのネットワークは広がり、基本ツールも、活用後のフィードバックを得て改善・拡充されていくのではないのでしょうか。

ESDコーディネーター育成の事業化

ESDが2015年以降も推進される仕組みとして、ESDの視点を持ったコーディネーターの育成と、そうして育ったコーディネーターのネットワーク形成が必須との考えから事業を進めた。OJT型のコーディネーター育成研修開発およびモデル実施、コーディネーター育成研修カリキュラム案の作成、さらに、ESDの理解の促進とコーディネーションのスキルを磨くために、ビデオ教材開発に取り組んだ。《地球環境基金助成、パナソニックNPOサポートファンド助成等》

この事業でめざしたこと

2015年以降もESDが推進される仕組みとして、ESDの視点を持ったコーディネーターの育成の事業化と、コーディネーターのネットワークを形成する。

ESDコーディネーター育成のためのカリキュラムと教材を作成する。

成果

- 1 ESDコーディネーター育成のためのカリキュラム全体像(案)と、地域のコーディネーターや実践者などの対象別研修パターン(4本)を作成することができた。
- 2 ESDコーディネーター研修に活用したり自主学習にも使える、1本3分～5分程度の映像教材を17本作成することができた。

プロジェクトの体制

リーダー： 壽賀一仁、森良

事務局： 飯島邦子、山本かおり、村上千里

協力者： 森高一、川嶋直、高田研、志賀誠治、河野宏樹、横田能洋、三隅佳子、重森しおり、鈴木律子、加藤大吾、北九州市、岡山市

事業の主なプロセス

■ OJT型研修のモデル実施

持続可能な地域づくりに取り組む地域(広島、茨城)において、既に活動の現場を持っている人を対象とした、コーディネーター育成研修のモデルカリキュラムを実施した。また、独自の予算でコーディネーター研修に取り組む北九州市、岡山市も「モデルカリキュラム実施ワーキンググループ(WG)」のメンバーとして、研修実施を行った。

■ ESDコーディネーター研修カリキュラム全体像の作成

OJT型研修実施後、研修実施地域の関係者が参加するモデルカリキュラム実施WGにおいて、カリキュラムおよび教材(ワークシート、動画、テキスト等)を共有し、汎用化に向けた検討を行い、「カリキュラムの全体像」と具体的な「実施パターン」に整理した。

■映像教材の制作

コーディネーター・プロジェクトの紹介とコーディネーター育成に有用な映像教材を17本制作し、Youtubeで公開するとともに、ウェブサイト“未来へつなぐ”からもアクセスできるようにした。



● ミッションムービー (1本)



● ESDコーディネーターのお仕事 (3本)



● ESDコーディネーターに必要な4つのチカラ (5本)



● ESDコーディネーターの必要な7つのスキル (8本)

■情報発信

コーディネーター育成の取り組みを紹介するニュースレター『未来へつなぐ』を発行した(年2回、A4判・8ページ、2000部)。また、プロジェクトの進捗や成果を公表するウェブサイトの内容を充実させた。

■コーディネーターのネットワークの形成

ESDコーディネーター育成をテーマとした全国ミーティングを岡山市にて開催し、コーディネーターの在り方に関するオープンな議論を行うとともに、全国の様々な分野のコーディネーターの交流の場とした。



プロジェクトの自己評価

担当理事：森良

- ESDコーディネーター育成のための基本的なツールをつくることのできた。このツール作成のプロセスで、ESDのコーディネート「肝」が押さえられた。地域や人びとの文脈の違いを踏まえ、課題や困難なことも含めて持続可能な地域づくりに前向きに変換させることが重要であるという共通理解がつけられた。このコーディネート「肝」をしっかり据えて取り組むことが肝心である。
- ESDコーディネーター研修を広げていくためには、推進する人のネットワークが必要である。2013年度、A〔育てる側の人たち〕30人、B〔コーディネーションを実際の仕事で活かす人たち〕100人という基になる人たちができたので、これをそれぞれAが100人、Bが1000人となることを目標に研修を実現していきたい。例えば、中国地方では「ESDコーディネーターバンク」という仕組みをつくらうという動きがあり、茨城では2013年度の研修を通じて水戸にESDセンターができて共創空間コーディネーター10人が誕生した。こうしたそれぞれの地域での内発的な動きを基に、コーディネーター研修会を広げていきたい。

全国ミーティングの開催

ESDの10年ラストイヤーとなる2014年に向け、その10年の間にESDの活動を展開してきた多様な主体の動きを確認・共有すべく、そうしたESDの実践地域の一つ岡山市で全国ミーティングを開催した。ここではまた、コーディネーションの在り方を学びあうことも目的とされた。

この事業でめざしたこと

2014年に向けた多様な主体の動きの「見える化」と、コーディネーションの在り方を学びあう。

成果

- 1 岡山市との共催で、市内の公民館の取組みをベースとした実質的な学びの場をつくることができた。
- 2 2014年に向けた情報共有を行い、ラストスパートへの盛り上がりを醸成することができた。

プロジェクトの体制

リーダー： 池田 満之、森 良
事務局： 山本 かおり、村上 千里
協力者： 岡山市、岡山大学、ゲスト参加者ほか

事業の主なプロセス

■ 実施概要

ESD-J全国ミーティング2013 in 岡山
「未来へつなぐ」を現場で学ぶ
～ 2014年のESDユネスコ世界会議と2015年以降のESDの推進に向けて～

ESDコーディネーター育成を主なテーマとして、全国ミーティングを岡山市にて開催。コーディネーターの在り方に関するオープンな議論を行うとともに、全国の様々な分野のコーディネーターの交流の場とした。またミーティング前後には、岡山市の協力でエクスカッションが行われた。

会議はUstreamで配信。報告は『ESDレポート』で行ったほか、ウェブサイトの詳細を公開している。

■ 内容

【2013年6月15日(土)】
「現場でのESD実践拡大に向けて(2014年に向けた文部科学省と環境省の取組み)」
「ESDと震災～災害教育という考え方」
「未来へつなぐ人(ESDコーディネーター)」育成プロジェクトについて
岡山市の取組みの紹介

【2013年6月16日(日)】

- 分科会 ① 高島公民館「生物多様性をいかした地域づくり」
② 岡西公民館「人と地域の力を引き出すコーディネーション」
③ 京山公民館「学校と地域が連携したESD」
④ 岡山大学「体験・事例から語る復興のコーディネート」

全体会「岡山を通してESDのコーディネーションを学ぶ」

2015年以降のESD推進の仕組みづくりについて



全国ミーティングの様子

プロジェクトの自己評価

担当理事：池田 満之

一般参加者140名、公民館分科会のみ参加者約40名、関係者約50名、計230名という、ESD-Jの全国ミーティングとしてはこれまでもっとも多くの方が参加してくださいました。ESD先進地である岡山で、多様なバックグラウンドの人たちと、2014年に向けた動きに始まり、ESDの本質、つなぐ人の重要性、2015年以降への期待や熱意を共有でき、とても有意義な会となりました。

学校と地域が連携した ESD推進の仕組みづくり事業

2013年度成果報告

2014年に向けた目標

- 教員向け、学校支援コーディネーター向けの、学校と地域をつなぐESD研修を各地に展開するとともに、学校と地域の連携によるESD実践事例の「見える化」が進んでいる。

2013年度の主な事業

1) 学校と地域の連携によるESDの情報共有、研修の実施

学校と地域の連携によるESDの取組みは全国的にも広がってきている。地域担当理事などが各地で会員と連携し、学校におけるESD実践普及のための研修を行ったり、講師を担ったりしてその推進に携わっている。しかしながら、このような動きを会員メーリングリスト等で共有してこうとする動きを活性化することは十分にはできなかった。

2) 学校におけるESDモデルカリキュラムの普及

環境省の「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」に関し、以下の2業務を行った。

● ESDの視点を取り入れた環境教育プログラムの作成支援業務

2012年度に選定された20件の実践プログラムを基に、学校の授業において展開可能な10時間程度のモデルプログラムに修正する作業の支援を担った。支援に当たっては、学校教育におけるESD展開の実績をもつ4名の学校教育関係者でチームを形成し、アドバイスを担っていただいた。

作成されたESDモデルプログラムは、本事業の全国事務局である地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)のウェブサイトにて公開された。そして全国のEPO等のコーディネートにより、全国47都道府県にて実行委員会を形成し、モデルプログラムを基にしたESD実践が展開された。実践結果もGEOCウェブサイトで公開されている。

● ESDの視点を取り入れた環境教育プログラムの公募・選定業務

本事業2年目となる実践プログラムの公募・選定の事務局を担った。選考委員会を開催し、42件の応募から20件の実践プログラムを選定した。

学校と地域が連携したESD推進の拡大に向けて



理事／学校と地域の連携によるESD推進事業担当：池田 満之

学校と地域の連携によるESDの取組みは、日本の各地で広がりつつあります。そしてそれらは個別の学校の取組みにとどまらず、東京都多摩地域や北陸三県、愛媛県新居浜市、愛知県岡崎市などにおいては、ESD-Jの地域理事や教育委員会等との連携のもと、面的な展開もなされています。また、ユネスコスクールの増加やユネスコスクール支援大学間ネットワークなどの活躍等によって、ESDの取組みが多様化しながら広がってきています。

そのような背景の下、ESD-Jでは2013年度、学校と地域の連携を推進する方策として、動き始めた地域の情報を活発に交流させるというアプローチを目指しました。しかしながら、理事および会員の中では様々な実践が展開されているにもかかわらず、その情報発信を積極的に行っていただくことは難しかったようです。これは一重に、ESDの実践者の多忙と、情報発信することによるインセンティブが弱かったことがあげられると思います。どうすれば、現場の魅力的な動きを、より多くの方たちと共有することができるのか、なかなか妙案は浮かびませんが、2014年度も地道に働きかけていこうと考えています。

学校におけるESDモデルカリキュラムの普及については、環境省が主催する「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」で、「ESDの視点を取り入れた環境教育プログラムの作成支援業務」と「ESDの視点を取り入れた環境教育プログラムの公募・選定業務」の2業務で協力することができました。作成した20のプログラムを基に、本事業の全国事務局であるGEOC、地域ブロック事務局である地方EPO等のもとで学校と地域の連携をふまえたモデルプログラムが、全国47都道府県で実施され、各地で多様な主体の連携・協働を生み出すきっかけになったことは、非常に有益な取組みだったと言えます。ESD-Jの理事や会員も、このプロセスに各地で参加しました。

学校と地域の連携を促すときにカギとなるポイントを整理し、発信していくことはとても重要であり、ニーズも高いと思います。今後、なんらかの形で取りまとめ、発信していけたらと思います。



ESDモデルプログラムが公開されたGEOCのウェブサイト

国際ネットワーク推進事業

2013年度成果報告

2014年に向けた目標

- NGOによるアジアESDネットワーク (ANNE) を設立する。また、国内外のESD推進に関する情報流通を支える体制が整っている。

2013年度の主な事業

1) アジアESDネットワーク (ANNE) 構築に向けた取組み

2014年のアジアNGO・ESDネットワーク設立に向け、ANNEで連携している団体等とともに、具体的な活動を起こすためのファンドレイズに取り組んだ。トヨタ環境活動助成プログラム「生物多様性を踏まえたアジアの持続可能な農山漁村社会の形成」事業を提案、2014年1月から2015年12月までに、2年間で700万円の助成金を獲得することができた。1月からは、事業実施体制づくりや、パートナー団体との調整など、事業開始に向けた準備作業を行った。

2) ESDに関する国際的な情報の収集・提供とそのための体制の強化

ユネスコほかESDを進める国際主要機関が発信するESDおよびポストMDGs (ミレニアム開発目標)、SDGs (持続可能な開発目標) に関する情報収集に努め、グローバル・アクション・プログラム (GAP) の英訳、意見募集、提案等に取り組んだ。またその結果をウェブサイトに公表した。ESD-Jの取組みを海外へ発信するための体制強化には着手できなかったが、GAPの翻訳には、4名の会員がボランティアで参加してくださった。



インド・グジャラタ州GRAM NIDHI地域での取組みの様子

アジアのNGOによるESDネットワーク形成元年

理事／国際ネットワーク推進事業担当：鈴木 克徳



ESD-Jは、その設立以来、アジアにおけるESD推進のためのNGOネットワーク形成に努め、アジアESD優良事例プロジェクト（AGEPP）、生物多様性条約第10回締約国会議（CBD/COP10）やリオ+20に向けたアジアのNGOからのメッセージ発出活動等を進めてきました。その間、アジアの主要なESD推進NGOと話し合い、ネットワークの名称を「アジアのNGOによるESD推進ネットワーク（Asian NGO Network on ESD: ANNE）」と命名すること、ANNEは比較的小規模に開始し、徐々にメンバーを拡大していくこと、ネットワーク形成を自己目的化するのではなく、ネットワーク活動によりそれぞれの団体が実質的なメリットを得られるような活動を行うことで合意しました。

そのような合意を踏まえ、2014年からは「生物多様性を踏まえたアジアの持続可能な農山漁村社会の形成」プロジェクトが2年プロジェクトとしてスタート。このプロジェクトは、地域の活性化と女性の地位向上などに取り組んでいるインドのグジャラタ州GRAM NIDHI地域を対象として、地域の人びとのエンパワーメントを進めるためのテキスト・ガイドラインづくりを行い、その成果をアジアの他国でも活用する可能性について検討することを目的とします。初年次の成果を議論するための国際ワークショップが2014年10月に岡山で開催される予定ですが、それに併せてANNE設立の記念式典を開催しようと考えています。この記念式典が、ポスト「ESDの10年」を力強く進めるためのアジアのNGOの結束の強化に大きく貢献することを期待します。なお、プロジェクト2年目となる2015年には、インドのケーススタディを基に開発されたテキストの、インドネシアやフィリピン、中国等、アジアの異なる国での適用可能性について検討することになっています。

2013～2015年にかけては、ポストESDの10年やポスト「ミレニアム開発目標」（ポスト2015）などに向けた活発な国際的議論がなされます。ESD-Jは、ポストESDの10年の中核をなす「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」案を翻訳し、日本人たちに公開・周知するとともに、各方面の意見を踏まえた意見書を2013年9月にユネスコに提出しました。また、GAPの具体化に向けた作業に注目し、具体化計画の策定等に積極的に貢献していく方針です。さらに、2014年11月のESDユネスコ世界会議で採択予定のGAPが国連総会で決議され、ポスト2015の人材育成活動に適切に反映されるよう、モニタリングしていきます。ポスト2015に向けた国際的議論が活発化している中、主要な国際情報を適時に取得し、周知・普及する方策を検討していきます。そのため、国際的に活発に活動しているNGO団体との連携・協力を強化するとともに、外務省をはじめとする関係省庁との情報・意見交換を進め、我が国のNGOの意見が適切に国際議論に際して表明されるように努めます。さらに、それらの情報の収集・加工および周知を進めるためのマンパワーの確保に向け、2014年度には、大学関係者等との連携を念頭に、ボランティアな国際情報の収集・発信チームの形成を目指します。

震災復興とESDをつなぐ事業

2013年度成果報告

2014年に向けた目標

- 復興支援や被災地との交流からの学びを全国各地のESDに生かす、また、ESDを震災復興のための人材育成に役立てる、といった双方向のESDモデル実践が生み出されるとともに、防災教育・気候変動を含めた減災教育の視点を持ったESDの「見える化」が進んでいる。

2013年度の主な事業

1) 全国ミーティングでの災害教育に関する発信

2013年6月15,16日に岡山で開催した「ESD-J全国ミーティング」において、「ESDと震災～災害教育という考え方」をテーマに、広瀬敏通氏（一般社団法人RQ災害教育センター）に講演をいただいた。

分科会にて、「体験・事例から語る復興のコーディネート」をテーマに、阿部正人氏（南三陸町立伊里前小学校教諭）、岡山大学の大学院生および学生から、被災地の当時および今の状況や課題、大学生の取組みについて話題提供があり、復興支援や防災意識を高めていくときのコーディネーションのポイントについて議論した。

2) 『未来をつくるBOOK』活用実践事例のウェブ公開

2011年11月より展開している『未来をつくるBOOK』の贈呈プログラムの実施校26校にアンケートを行い、実践状況を確認するとともに、実施レポートを公開するウェブサイトを開設した。現在、7件のレポートを公開している。

3) 「ESDいわてミーティング」の開催協力

被災地で展開された、復興に向けた様々な動きの中で子どもや若者たちが大きく成長していった現状をふまえ、復興とESDの関係性について議論し、今後の復興に向けた動きの中でESDはどのような意義・役割を持つことができるのかを議論する場として「ESDいわてミーティング」を企画・開催した。

震災復興とESDをつなぐ

理事／震災復興・地域再生支援事業担当：小金澤 孝昭



ESD-Jの「震災復興とESDをつなぐ」取組みには、2013年度、3つの大きな柱がありました。

まず『未来をつくるBOOK』は、その普及とともに、これを活用した実践事例のウェブ公開を2011年11月より展開しています。実施校26校にアンケートを行い、『未来をつくるBOOK』の実践状況を確認するとともに、実施レポートを公開するウェブサイトを開設しました。現在、7件のレポートを公開しています。こうした取組みを強化していくことが課題となりました。

震災復興に関するESD-Jの事業としては、6月15、16日に岡山で開催した全国ミーティング」において、「ESDと震災～災害教育という考え方」をテーマに、広瀬敏通氏（一般社団法人RQ災害教育センター）の講演、分科会では、「体験・事例から語る復興のコーディネート」をテーマに、阿部正人氏（南三陸町立伊里前小学校教諭）、岡山大学の大学院生および学生から、被災地の当時および今の状況や課題、大学生の取組みについての話題提供がありました。ここでは、復興支援や防災意識を高めていくときのアプローチ方法とESDとの共通性や、シナジーを生む可能性について語られるとともに、コーディネーションのポイントについて議論しました。また、地域ミーティングの開催支援では、2014年3月16日にESDいわてミーティング「復興とESD」を開催し、被災地の復興・再生と持続可能な社会づくりをつなぐESDをテーマに議論しました。

各地域で取り組まれている、震災復興とESDをつなぐ様々な活動実践の情報を収集し、その目的、成果、課題を整理して共有化する情報の受発信を持続的に行うことが課題となっていました。こうした取組みは不十分でした。またESD地域ミーティングやESDコーディネーター養成講座で行われているESDの人材育成の取組みを、震災復興のための人材育成に役立てることを検討したいと考えていましたが、課題としていたESDモデル実践と、震災や防災・減災害視点を持ったESDの双方向の取組みの提案は今後の課題となりました。

こうした、総括を踏まえて次年度は、

- ① ESDユネスコ世界会合(名古屋・岡山)への震災や防災・減災害視点を持ったESDの反映、ESDフォローアップ会合では、2015年以降のGAPについても震災や防災・減災害視点を持ったESDを提案することを視野に入れたいと思います。また、国連世界防災会議へのコミットメントも検討する必要があるでしょう。
- ② 今後も広く『未来をつくるBOOK』の活用を呼びかけるとともに、ESD地域ミーティングやESDコーディネーター養成講座での展開と活用を呼びかけていきます。
- ③ 震災復興とESDをつなぐ各地の実践活動の開催情報や成果情報を収集し、その内容を被災地外のESD関係者に発信するとともに、ESD分野の人材育成に関する情報を被災地に届けるなど、双方向で共有化できるような体制を検討します。

普及啓発、情報収集・提供 およびインフラ構築事業

2013年度成果報告

2014年に向けた目標

- ESD-Jが2014年までに実現したい仕組みづくりに向けた取組みや、各地のESD実践の広がりをきめ細かく発信していくことで、ESDをともに進める仲間が大きく広がっている。また、ESD推進機関との連携により、ESD関連情報がより入手しやすい仕組みが生まれている。

2013年度の主な事業

1) ESDおよびESDの10年に関する様々な動きの情報発信

理事や会員との連携を強化し、ウェブサイトおよびメーリングリストにおけるタイムリーな情報発信にパワーをシフトした。メルマガおよびフェイスブック等との連動で、会員ネットワーク外への情報発信力を高めた。これに伴い、紙媒体である『ESDレポート』をスリム化し、年2回の発行とした。

ESDレポート

32号 9月18日発行

特集：ESD-J全国ミーティング2013が岡山で開催！

33号 3月12日発行

特集：“国連ESDの10年”の総括年がやって来た！



2) ESD普及のための研修・講師派遣

ESDに関連する各種講演や研修等の依頼に応じて、16件の講師派遣を行った。また、愛知県が県下の全市町職員を対象に行ったESD研修では、EPO中部とともに企画、講師紹介、テキストブック作成に協力した。

さらに環境省からの依頼により、ESD普及のためのパンフレット、およびESD説明の手引き(パワーポイント)の制作を行った。

◆事務局にて依頼を受け、ESDの普及に向けてESD-J理事が寄稿した各紙

環境省国際広報誌『JEQ』、日刊工業新聞、日経BP社『日経エコロジー』、日本環境教育学会ニュースレター
日立環境財団『環境研究』、『部落解放』、文部科学省月刊『生涯学習』、文部科学省『文部科学広報』

2014年以降に向けた情報の発信



理事／普及啓発・情報収集・提供事業担当：吉澤 卓

情報インフラの面では、総括年における情報の増大に向けて、本来なら準備を完了させるべき2013年でした。2014年は総括年であること、ESD-Jの体制移行が既定であることを含めると、ウェブサイトのリニューアルは、体制移行の諸条件が確立された時点で検討に入るべきと考えます。具体的には、既存の仕組みの中で、発信した内容を、会員・会員外にかかわらずより多くの人たちに届くよう、きめ細かい対応で臨む等の対応が必要です。

【主に会員に向けて】

- 1) 「ウェブサイトの更新」と「更新されたことの周知(MLやフェイスブック)」の連携
- 2) 『ESDレポート』の発行内容をウェブでも活用(pdfでのアップではなく、各記事の個別更新)
- 3) 事務局のマンパワーを補うような理事および会員による発信サポート体制の整備
 - 各地でのイベント告知
 - 各地でのイベント報告
 - GAPコミットメント等、各主体での動きの共有
- 4) 市民提言フォーラム活動の進捗に応じて、提言の周知や、提言への参画の拡大が図れるようなリアルタイムの発信。

【会員外に向けて】

- 1) 2013年度に登録した「ヤフージャパン」Links for Goodキャンペーンを活用して、広く一般のウェブ利用者に対しての啓発広告の運用を行っていきます(テキスト広告によるESD-Jウェブサイトへの誘導)。
例：2014年11月ESDユネスコ国際会議が日本で開催／「持続可能な開発のための教育の10年」／ESD-Jは未来を創る人の応援団です
- 2) ESD-Jのフェイスブックページでは約900人の「いいね」を獲得しています。もっとも即時性のある発信ツールとして、2014年度も各地のイベント開催情報や、実際に行われたイベント現場からの発信等を随時実施するとともに、「いいね」のさらなる獲得も推進し、ソーシャルツールの活用者に向けての情報伝播を広げていきます。



ESD-Jのフェイスブックページ

地域発ESD ■ESD-J地域担当理事レポート■

2013年度も日本各地で様々なESD活動が展開されました。このコーナーでは、ESD-J理事がかかわった各地のESDの動きをご紹介します。レポートからは、行政区単位で、または行政区を越えて、協働によるESDを生み出す基盤づくりに取り組む地域が増えてきている様子がうかがえます。

※ 2014年度、ESD-Jはこのような動きを後押しすべく、ESD地域ミーティングの開催を呼びかけます。

北海道から

2013年9月の大沼ラムサール国際シンポジウム（地球環境基金助成事業）では、基調講演者として名執芳博ESD-J理事を招き、他地域も含めてのラムサールの取組みについて紹介した。2014年1月、さっぽろ自由学校「遊」とEPO北海道の共催事業に参加。総勢30名以上が集まり、これからの北海道のESDについて話し合われた。その後もメーリングリストなどを通じて活発に情報交換をしている。2014年度には、EPO北海道などの団体とともに新たにRCEへの取組みもスタートする。（北海道地域担当理事／池田 誠）

東北から

若い世代にESDを学んでもらう「せんだい環境ユースカレッジ」を始めて3年目となる2013年、津波被災地域のいぐねの調査や環境フォーラムの発表に13人が取り組んだ。「もりもりレスキュー隊」は、仙台市内60箇所以上の小学校などで、環境NPOが開発した環境教育プログラムを授業に活用した。13回目となるFEEL仙台（杜の都の市民環境教育・学習推進会議）の環境フォーラムでは、環境教育学習やESDに取り組んでいる市民団体、企業、行政、大学が集まって、展示や発表を行った。（東北地域担当理事／小金澤 孝昭）

関東から

茨城と多摩で地域ミーティングの準備に取り組んだ。茨城では、2013年度に行われた地域課題解決のための多様な主体による協働プロジェクトづくり（フューチャーセンター∞茨城）と、新荘小学校の廃油回収プロジェクトの地域での展開の流れを統合して、2014年6月に地域ミーティングを実施する予定。多摩市と稲城市では、4年にわたる取組みで学校に定着したESDを地域全体で展開していくきっかけの場として地域ミーティングを2014年5月に実施する。主催は教育委員会だが、イニシアティブはFEC（Food、Energy、Care）のNPOがとっていく。（関東地域担当理事／森 良）

北陸から

2013年度、地球環境基金、環境省の人材育成事業等を活用し、北陸3県で、学校のESD支援活動、ESDモデルプロジェクト等を実施。各県のモデル校を対象としてESD環境教育プログラムを作成した。東海・北陸ユネスコスクール交流会を開催するとともに、北陸の大学のESDネットワーク活動を推進し、各大学のESD活動に関するデータベースを構築した。2014年度は、北陸におけるDESDを総括するとともに、マルチステークホルダーによる北陸ESDコンソーシアムの設立を目指す。（北陸地域担当理事／鈴木 克徳）

東海から

2014年世界会議の開催地として、愛知・名古屋では、ESDの認知度向上のためのイベント、学生を対象にしたワークショップや企業の研修などが活発に行われた。三重と岐阜でも、ESD研修やユネスコスクール交流会等、多様な主体による取組みが展開。ESD-Jとの協力事業として、愛知県の自治体職員向けのESDハンドブックが作成された。2014年1月の「ESD地球市民村ラーニング・プログラム」では、愛知県内でESDを実践している教員と、『未来をつくるBOOK』を活用したESD授業体験を実施した。こうして地域に育まれてきたESDの主体基盤のつながりを、2014年度は行動にチェンジさせていきたい。（東海地域担当理事／新海 洋子）

近畿から

10年目を迎えた「京都・環境教育ミーティング」に池田満之ESD-J副代表理事を招き、京都教育大の水山光春教授と、ESDの10年の取り組みで見えた成果、課題、持続可能な社会をつくるための価値観や行動について多彩な話をうかがった。また、ESDのプログラムとして国連で認証されている「エコスクール」の取り組みを生駒市の小学校で推進。同プログラムでグリーンフラッグを得ていた加西市西在田小学校では、審査の結果引き続きグリーンフラッグを得た。(近畿地域担当理事/枚本 育生)

中国から

2013年度は、6月に岡山でESD-Jの全国ミーティングが、10月に「ESDの10年・地球市民会議2013」と「ESDテーマ会議2013」が、12月にEPOちゅうごくによる「ポストDESDミーティング」などがあり、中国地域のESD関係者との対話の場が持てた。2014年度は「ESDに関するユネスコ世界会議」関連会議やプレ会議が岡山や広島であるので、中国地域のESD関係者と集まり、ESD-Jが出す提言に活かせる意見集約などを行いたい。(中国地域担当理事/池田 満之)

四国から

2013年度は、四国EPOとの連携を強化しつつ、環境省の人材育成事業等の実施を通じて、四国各県の多様なESDの担い手とネットワークが構築できた。愛媛県新居浜市教育委員会やユネスコ協会を中心に市全体での取り組みが始まり、池田満之ESD-J副代表理事から岡山の取り組みを紹介してもらうなど理事間の連携もできた。また、松山市立新玉小学校ではESDの取り組みが全学的なものとなり、2014年1月「ESDキックオフミーティング(名古屋)」、2月「KID's ESD FES(東京)」に参加してアイデア賞を受賞した。(四国地域担当理事/竹内 よし子)

九州から

2013年度は、ESDコーディネーター育成事業として、地域課題の解決と企画力を磨く「ESD未来創造セミナー」、研修修了生を対象に実践に必要な知識やコーディネート力を高める「修了者サポート」事業を実施した。10月には、九州各地でESDに取り組むNPO・市民団体の活動情報交換と啓発を目的に、九州ESD推進ネットワーク会議を開催した。2014年度は、世界会議を視野に、九州全域を対象とする地域ミーティング、北九州地域対象の提言ワークショップ開催を準備中である。(九州地域担当理事/三隅 佳子)

沖縄から

学校教育におけるESD推進の動きが中心となっている沖縄では、2013年に県内のユネスコスクール加盟校が2校となった。7月に県内最初の加盟校北谷中学校でESDの校内研修、8月には県教育委員会主催によるESD研修会が開催された。琉球大学では学生と教員へのESD活動を支援し、県外の大学生との意見交換会や東北被災地への研修、HESDネットワークへの参加を通してESD活動を実践。今後もESDの幅広い分野への周知に繋がる島嶼地域固有の課題克服を目指した、沖縄ならではのESD活動の展開が求められている。(沖縄地域担当理事/大島 順子)



ESD-J 2013 年度活動履歴

4月2日	ESDコーディネータープロジェクト第2フェーズ立ち上げ会議 開催
4月18日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第1回検討会議 開催
5月9日	「地球環境基金20年のあゆみ」記念座談会 参加
5月14日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第2回検討会議 開催
5月18日	第1回理事会 開催
5月18日	第1回理事懇談会 開催
5月19日	国立吉備青少年自然の家教育事業「吉備ボランティア養成研修」講師派遣
5月30日	ESDコーディネータープロジェクト第2フェーズ第1回全体会議 開催
6月5日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第1弾 撮影
6月15日	ESD-J総会開催
6月15-16日	ESD-J全国ミーティング2013 開催
6月19日	立教大学全学共通カリキュラム総合教育科目「持続可能な開発のための教育」講師派遣
7月1日	ESD推進と伊藤園への期待に関するステークホルダーダイアログ 受託実施
7月16日	『未来へつなぐ』no.4 編集会議
7月18日	ESDレポート年間計画および32号編集会議 開催
7月23日	ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会 「自治体職員のためのESDセミナー」企画・実施協力
7月27-28日	ESDコーディネーター広島第1回合宿研修 共催
8月1日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第3回検討会議 開催
8月6日	第1回「ESDに関するユネスコ世界会議」 ステークホルダーの主たる会合に関する運営協議会 委員参加(以降、2月13日に参加)
8月7日	環境省事業「環境教育認定・表彰に係る実施マニュアル検討会」委員参加 (以降、10月17日・12月22日・2月5日・2月27日に参加)
8月20日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第1弾 公開
8月22日	第2回理事懇談会 開催
8月22日	ESDコーディネータープロジェクト検討会議 開催
8月31日	ESDコーディネーター広島第2回集合研修 共催
9月13日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第4回検討会議 開催
9月18日	『ESDレポート』32号 発行
9月20日	『未来へつなぐ』no.4 発行
9月29日	環境監査研究会定例会「持続可能な開発のための教育(ESD)と企業」講師派遣
10月15-16日	環境カウンセラー協会「環境カウンセラー研修」講師派遣
10月18日	ESDの10年・地球市民会議2013 共催
10月19日	ESDテーマ会議2013 共催
10月26日-11月2日	第2回「イオンeco-1 (エコワン)グランプリ」審査委員会協力

10月29日	大妻女子大学授業「ESDについて」講師派遣
11月10日	第3回理事懇談会 開催
11月10日	ESDコーディネータープロジェクト検討会議 開催
11月18日	ESDコーディネーター茨城第1回集合研修 共催
12月1日	ユネスコスクール全国大会 出展
12月2日	ESDコーディネータープロジェクト第2フェーズOJTワーキンググループ全体会議 開催
12月3日	ESDコーディネーター茨城第2回集合研修 共催
12月5日	消費者教育フェスタ 出展
12月12日	ESDレポート33号編集会議 開催
12月13日	ESDコーディネータープロジェクト第2フェーズ成果物検討会議 開催
12月14日	東京都教育支援コーディネーター・フォーラム 出展
12月15日	ESDコーディネーター茨城第3回集合研修 共催
12月21日	第2回理事会 開催
12月21日	第4回理事懇談会 開催
12月21日	ESDコーディネータープロジェクト検討会議 開催
12月23日	どうかんやまFESTA 出展
1月13日	ESD地球市民村「ラーニング・プログラム」共催
1月15日	ESDコーディネーター茨城第4回集合研修 共催
1月16日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第5回検討会議 開催
1月18日	気候ネットワーク「環境保全戦略講座(環境教育分野)」講師派遣
1月19日	ESDコーディネーター広島第3回集合研修 共催
2月8日	関東ESD学びあいフォーラム分科会 講師派遣
3月1日	第10回開発教育全国ネットワーク会議 講師派遣
3月1日	京都・環境教育ミーティング 講師派遣
3月4日	ESDコーディネータープロジェクト第2フェーズ成果物検討会議 開催
3月6日	「ESDの10年」後の環境省環境教育推進方策懇談会
3月12日	『ESDレポート』33号 発行
3月14日	環境教育フォーラム2014 講師派遣
3月15日	日本NPO学会年次総会パネルディスカッション 講師派遣
3月18日	『未来へつなく』no.5 発行
3月19日	ESDコーディネーター研修「広島の未来をカタル」ワークショップ 共催
3月22日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第2弾 撮影
3月23日	第3回理事会 開催
3月23日	第5回理事懇談会 開催
3月31日	ESDコーディネータープロジェクト映像教材第2弾 公開

団体正会員・賛助会員・特別賛助会員・連携交流団体名簿

団体正会員：89 団体

(公財) オイスカ
(公財) キープ協会
(公財) 五井平和財団
(公財) 公害地域再生センター (あおぞら財団)
(公財) 日本環境協会
(公財) 日本野鳥の会
(公財) 日本ユニセフ協会
(公財) 日本YMCA 同盟
(公財) ボーイスカウト日本連盟
(公財) ユネスコ・アジア文化センター
(一財) 京都ユースホステル協会
(一財) 北海道国際交流センター
(公社) ガールスカウト日本連盟
(公社) 青年海外協力協会 (JOCA)
(公社) 日本環境教育フォーラム
(公社) 日本シェアリングネイチャー協会
(公社) 日本ユネスコ協会連盟
(一社) あいあいネット
(一社) 日本ネイチャーゲーム協会
(一社) 農山漁村文化協会
国立大学法人 岩手大学
国立大学法人 筑波大学 農林技術センター
国立大学法人 北海道大学 サステナビリティ・ウィーク
岡山大学ユネスコチュアプログラム
立教大学 ESD 研究所
学校法人 日本自然環境専門学校
岡山市
北九州市
NPO 法人 岩木山自然学校
NPO 法人 ECOPLUS
NPO 法人 エコけん
NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター (ECOM)
NPO 法人 えひめグローバルネットワーク
NPO 法人 オーシャンファミリー海洋自然体験センター
NPO 法人 開発教育協会
NPO 法人 環境市民
NPO 法人 くすの木自然館
NPO 法人 国頭ツーリズム協会
NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター
NPO 法人 ぐりーんぐらす
NPO 法人 グローバルプロジェクト推進機構 JEARN
NPO 法人 国際自然大学校
NPO 法人 コモンビート
NPO 法人 これからの学びネットワーク
NPO 法人 しずおか環境教育研究会 (エコエデュ)
NPO 法人 自然体験活動推進協議会 (CONE)
NPO 法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
NPO 法人 生態教育センター
NPO 法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議 (CASA)
NPO 法人 地球と未来の環境基金
NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ
NPO 法人 としまユネスコ協会

NPO 法人 フォーエヴァーグリーン
NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし
NPO 法人 やまぼうし自然学校
岡山ユネスコ協会
環境・国際研究会
北九州 ESD 協議会
くりこま高原自然学校
こくさいこどもフォーラム岡山
堺市女性団体協議会
サス塾
サステナブル・アカデミー・ジャパン
ジャパン・フォー・サステナビリティ
世界女性会議岡山連絡会
仙台いぐね研究会
仙台広域圏 ESD・RCE 運営委員会
創価学会平和委員会
田んぼの楽校
日本アウトドアネットワーク
日本環境ジャーナリストの会
日本ソーラーエネルギー教育協会
日本ホリスティック教育協会
ハグ平和アピール平和教育地球キャンペーン (GCPEJ)
平和の文化をきづく会
ホールアース自然学校
ほっと村
緑の環・協議会
養生庵
(株) 橋本新企画
(株) フルハシ環境総合研究所
(有) プラス・サーキュレーションジャパン

賛助会員：10 団体

(公財) 旭硝子財団
(公財) 損保ジャパン環境財団
アサヒビール (株)
(株) 伊藤園
王子ホールディングス (株)
(株) 損害保険ジャパン
東洋製罐 (株)
パナソニック (株)
(株) 日立製作所 情報・通信システム社
(株) モンベル

特別賛助会員：1 団体

(株) 日能研

連携交流団体：5 団体

国際協力機構 地球環境部
JICA 地球ひろば
国際連合広報センター
国際連合大学高等研究所
国連人口基金東京事務所

(2014年3月31日現在)

役員および実施体制

1. 役員および職員

代表理事	阿部 治	個人会員	立教大学ESD研究所 / (公社)日本環境教育フォーラム
	重 政子	個人会員	NPO法人 自然体験活動推進協議会 / (公社)ガールスカウト日本連盟
副代表理事	池田 満之	団体会員	岡山ユネスコ協会
理事	池田 誠	団体会員	(財)北海道国際交流センター
	大島 順子	個人会員	琉球大学
	小金澤 孝昭	団体会員	宮城教育大学/仙台いぐね研究会
	新海 洋子	個人会員	中部環境パートナーシップオフィス
	壽賀 一仁	団体会員	(一社)あいあいネット
	枚本 育生	団体会員	NPO法人 環境市民
	鈴木 克徳	個人会員	金沢大学
	関 正雄	賛助会員	(株)損害保険ジャパン / (公財)損保ジャパン環境財団
	竹内 よし子	団体会員	NPO法人 えひめグローバルネットワーク
	長岡 素彦	個人会員	持続可能な開発のための教育の10年さいたま
	名執 芳博	個人会員	(公財)長尾自然環境財団
	三隅 佳子	団体会員	北九州ESD協議会
	村上 千里	個人会員	認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議
	森 良	団体会員	NPO法人 エコ・コミュニケーションセンター
	吉澤 卓	個人会員	

監事	浅見 哲	税理士 浅見哲事務所
	吉岡 睦子	吉岡睦子法律事務所
顧問	池田 香代子	ドイツ文学翻訳家・口承文芸研究家
	岡島 成行	(社)日本環境教育フォーラム 理事長
	CWニコル	作家
	廣野 良吉	成蹊大学名誉教授

事務局	事務局長	村上 千里
	常勤スタッフ	長澤 正嘉
	非常勤スタッフ	飯島 邦子、宮崎 裕子、山本 かおり
	契約スタッフ	後藤 尚味、野口 扶美子、大塚 明(いずれもプロジェクト単位)

2. 実施体制

主な担当理事

2014年、2015年以降に向けた準備	阿部治、重政子、関正雄
学校と地域の連携によるESD推進	池田 満之、森 良
地域におけるESD推進およびコーディネーターの社会化	壽賀 一仁、森 良
国際ネットワーク推進	鈴木 克徳、名執 芳博
震災復興・地域再生支援	小金澤孝昭、長岡素彦
普及啓発・情報収集・提供	吉澤 卓、長岡 素彦

地域担当理事	池田 誠(北海道)、小金澤 孝昭(東北)、森 良(関東)、鈴木 克徳(北陸)、新海 洋子(東海)、枚本 育生(近畿)、池田 満之(中国)、竹内 よし子(四国)、三隅 佳子(九州)、大島 順子(沖縄)
組織運営理事	阿部 治、重 政子、池田 満之、鈴木 克徳、村上 千里

2013 年度 決算見込

活動計算書

2013 年 4 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日まで

単位：円

科目	金額		
I 経常収益			
1 受取会費			
正会員 受取会費	2,050,000		
準会員 受取会費	573,000		
賛助会員 受取会費	1,500,000	4,123,000	
2 受取寄付金			
受取寄付金	993,912	993,912	
3 受取助成金等			
受取助成金	8,650,000	8,650,000	
4 事業収益			
自主事業収益	1,797,300		
受託事業収益	4,480,000		
その他事業収益	0	6,277,300	
5 その他収益			
受取利息／為替差益	920	920	
経常収益計			20,045,132
II 経常費用			
1 事業費			
(1)人件費			
給料手当	4,974,512		
法定・福利厚生費	624,640		
通勤費	285,849		
人件費計	5,885,001		
(2)その他経費			
売上原価	3,460		
業務委託費	4,576,319		
諸謝金	920,400		
旅費交通費	2,772,596		
通信費	268,329		
印刷製本費	564,829		
賃借料	64,050		
その他雑費	439,406		
その他経費計	9,609,389		
事業費計		15,494,390	
2 管理費			
(1)人件費			
給料手当	3,357,461		
法定・福利厚生費	449,785		
通勤費	260,581		
人件費計	4,067,827		
(2)その他経費			
会議費	7,259		
旅費交通費	82,408		
交際費	0		
通信運搬費	287,564		
消耗什器備品費	0		
消耗品費	66,951		
印刷製本費	54,311		
水道光熱費	0		
賃借料	252,000		
支払手数料	360,177		
支払利息	0		
租税公課	214,539		
雑費	20,000		
その他経費計	1,345,209		
管理費計		5,413,036	
経常費用計			20,907,426
当期経常増減額			-862,294
法人税、住民税及び事業税			0
当期正味財産増減額			-862,294
前期繰越正味財産額			5,411,981
次期繰越正味財産額			4,549,687